

## 愛 川 巡 検

鳥 田 千 洋

11月19日、快晴。内藤先生の御指導のもと、愛川巡検が行われた。愛川町は、神奈川県のほぼ中央に位置する古くから燃糸業で栄えた町である。現在も燃糸業は重要な地場産業であるが、規模は年々縮小しており、これからのあり方が模索されている。今回の巡検の目的は、主に燃糸工場をまわり、こうした燃糸業の現状を考察することである。

集合は小田急線本厚木駅、10時。最初の見学場所、神奈川中央養鶏農業協同組合までの足となるバスの運行数が少ないので、予定したバスをのがすと次のバスまでかなり待つことになるから、時間厳守と言いつ渡されていた。10時が迫り学生が徐々に集まってくる。しかし、内藤先生の姿が見えない。どうしたんだろう、皆の間に緊張が走る。そこへ駅員さんの知らせで先生が遅れることが判明。先生とは現地で落ち合うことになり、それからバスターミナルを探して女子大生の集団が右往左往の大騒ぎ。なんとか予定のバスに乗れて一安心。これが巡検中一番の大騒動だった。

養鶏組合で無事先生と落ち合い、ようやく巡検らしくなってきたところで組合員の方が組合についての説明を下された。組合は飼料などの購入と鶏卵等の販売を共同して行う他は、独立した農家が、各々養鶏を行うシステムであるということだった。説明の次に鶏卵GPセンター（Grade and Pack Center）と鶏舎の見学をした。GPセンターでは、鶏舎から出てきた卵を、形や重さによって仕分けし、箱づめされるまでの過程を見学。一連の作業はベルトコンベアーで流れ作業ですすめられてゆく。光を当ててヒビの有無を確認していたのが興味深かった。鶏舎は奥行85mの大きなもので中は真暗で臭かった。鶏舎のまわりには住宅も

あるので、この臭いをもらさないのに苦労があるということだった。23,000羽の鶏が所狭しとうごめいているのは、なかなか不気味であり、このような環境で生まれた卵を私達は毎日口に入れているのかと思うと、複雑な気分であった。養鶏組合で目についたのが、外国人労働者の多いことである。敷地内の看板には、日本語、英語、アラビア語の3ヶ国語が書かれており国際的雰囲気漂わせていた。

養鶏組合で各自持参した弁当で昼をすませ、いよいよ半原燃糸組合へ。燃糸業の歴史から糸の燃り方、染色の仕方まで丁寧に説明して下さった。大規模なレース工場では、デザイン画製作の段階から、実際レースが作られるまで順を追って見学した。ここで作られているのは、エンブローダーレースというもので、あらかじめ用意されたレース地に、デザインを刺しゅうする方法で、機械化がすすみ、大量生産が可能なのだそう。

燃糸組合を後にして、鈴木さんという個人経営の燃糸工場にお邪魔した。ものすごい勢いで沢山のボビンが目の高さの位置で、回っているのがわからない程の速さで回っていて髪を引き込まれない様注意して下さい、などと注意されて、こわごわ見学を終えた。最後に、燃糸組合に戻って、マフラーなど製品の即売場をさんざん眺めて日程の全てを消化した。燃糸組合の前で記念撮影をし、本厚木駅に戻って現地解散となった。

初めての巡検ということで、遠足気分が濃く、反省点が多かったが、巡検というものが、どういうものなのか知るとい意味では有意義な一日だったように思う。

（11月19日 内藤教官指導）